ЯAP 日本ロシア文学会
Японская Ассоциация Русистов

名古屋外国語大学創立30周年記念事業

The World with Us!
NUFS

プレシンポジウム

カタストロフィの想像力とロシア文化

二極化、独裁、ネオナショナリズム、「ポスト真実」、反知性主義など、
グローバリゼーションの進展のなかで世界は今さまざまな危機に瀕している。
地球温暖化による環境破壊、異常気象が私たちの生活を直撃し、不吉な予感を掻き立てている。
他方、AI、ビックデータによって人間の存在様式そのものも著しい変容を遂げ、
ポストヒューマンの思想も台頭しつつある。
そうした状況のなかで、人文学は、文学は、小説は、何ができるのか。
ロシア文化の立ち位置とはどのようなものか。
現代社会を代表する作家の一人平野啓一郎氏の講演を軸に、
ロシア文学・文化の研究者が熱く語る。

2018年10月26日(金)

司会 亀山 郁夫（名古屋外国語大学学長）
時間 16:40〜18:30
場所 名古屋外国語大学 5号館1階511番教室
共催 日本ロシア文学会・名古屋外国語大学
協力 日本ドストエフスキー協会

記念講演

カタストロフィと小説
平野 啓一郎
（作家）

シンポジウム

危機の想像力とドストエフスキー
亀山 郁夫
（名古屋外国語大学学長）

中世ロシアにおける終末の想像力
中澤 敦夫
（富山大学教授）

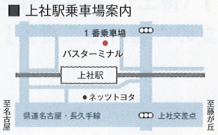
ナショナル・アイデンティティとしてのカタストロフィ？
乗松 亨平
（東京大学准教授）

■申込み方法

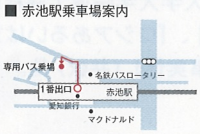
当日参加も可能ですが、準備の都合がありますので、事前のお申込みをお願いいたします。右記のQRコードを携帯電話やスマートフォンで読み込んで頂くか、下記URLをパソコン等で直接入力して、申込みのフォームに必要事項を入力、送信してください。
https://req.qubo.jp/wlac/form/20181026

■本学へのアクセスについて■
当日、駐車場はありませんので公共交通機関または上社駅、赤池駅からの専用バス（無料）をご利用ください。
専用バスにご乗車の際は、イベントに参加する旨を運転手にお伝えください。

■ 上社駅乗車場案内



■ 赤池駅乗車場案内



問合せ先
日本ドストエフスキー協会 dsjn_gg@nufs.ac.jp
日本ロシア文学会 yaar@yaar.jpn.org

本イベントにおける写真撮影や録音はご遠慮いただきますよう、お願い申し上げます。
会場では腕章を付けたカメラマンが記録用の写真撮影を行っています。本学ウェブサイトやその他の刊行物に、写真が掲載されることがありますのでご了承ください。

プレシンポジウム

カタストロフィの想像力とロシア文化

記念講演

平野 啓一郎（作家） HIRANO Keiichiro

1975年、愛知県生まれ。1歳で父を亡くし、18歳まで福岡県北九州市に住む。京都大学法学部在学中、「新潮」に一挙掲載された小説『日蝕』でデビュー、第120回芥川賞を当時最年少の23歳で受賞。その後、『決壊』(08年)で芸術選奨文部科学大臣新人賞、『ドーン』(09年)でドゥマゴ文学賞、『マチネの後で』(17)で、渡辺淳一賞などに輝く。現代文明に対する独自の視点から政治、社会問題への発言も多く、その小説の多くが、鮮烈な問題意識に貫かれているが、その一方で、純古典的とも呼ぶべき様式の長編小説も手掛ける。今年作家デビュー20周年を迎え、長編小説『ある男』が話題となっている。

シンポジウム

亀山 郁夫（ロシア文学、名古屋外国語大学学長） KAMEYAMA Ikuo

「20世紀以降の世界においてドストエフスキー文学がはらむ現代性を《カタストロフィ》をキー概念として考察することの意味を説明し、今後のドストエフスキー研究の可能性について提言を行いたい。キー概念は、《災厄》《終末》《危機》《悲劇》の4つ。実例として、『罪と罰』のエピソードで描かれるラスコーリニコフの「繊毛虫」の夢や、ヴォルテール『キャンディード』が『カラマーゾフの兄弟』の執筆に与えた影響を挙げる」

プロフィール

1949年生。東京外国語大学卒業、東京大学大学院博士課程単位取得満期退学。東京外国語大学名誉教授。主な著作として、『甦るフレーブニコフ』『磔のロシア』『ショスタコーヴィチ 引き裂かれた栄光』、主な訳書ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』『罪と罰』『悪霊』『白痴』他。

中澤 敦夫（ロシア文学、富山大学教授） NAKAZAWA Atsuo

「キリスト教の本源にかかわる《終末》の問題は、正教をよりどころに思索してきた中世ロシアの知識人にとっても主要な主題の一つだった。とりわけキリスト教受容の初期、創世6000年紀末、教会分裂期などの危機の時代には、《終末》が広く知識人をとらえ、彼らは歴史や生のあり方について強い現実感をもって思索を繰り広げた。報告では、ロシア中世の終末思想の特質について検討しつつ、その現代における系譜についても考ええる」

プロフィール

1954年生。上智大学卒業、一橋大学大学院博士課程単位取得満期退学、ロシア連邦ロシア文学研究所文学博士。主な訳書として、リハチョフ『中世ロシアの笑い』(共訳)、グレーヴィチ『同時代人の見た中世ヨーロッパ』(共訳)他。17年、ドミートリー・リハチョフ賞受賞。

乗松 亨平（ロシア文学、東京大学准教授） NORIMATSU Kyohei

「ロシアはその歴史上、外国の侵攻や革命などのカタストロフィにくりかえし見舞われてきた。ユーリー・ロトマンはそれを《爆発》と呼び、《爆発》によりすべてが反転する二極的構造としてロシア史を特徴づけた。ただ、このような見方はロシアに限定されるものではない。美術批評家の椹木野衣は『震美術論』で、定期的なカタストロフィ=地震による破壊が日本文化を特徴づけると論じた。カタストロフィをナショナルな特徴とみなすこれらの論について、そのゆえんと意味を考えたい」

プロフィール

1975年生。東京大学卒業、東京大学大学院博士課程終了（博士）。主な著作として、『リアリズムの条件―ロシア近代文学の成立と植民地表象』、『ロシアあるいは対立の亡霊:「第二世界」のポストモダン』、主な訳書として、ヤンポリスキー『隠喩・神話・事実性』（共訳）他。